

下諏訪における工業的土地利用の文化層序

齋藤 功・呉羽正昭・藤田和史

キーワード：文化層序，地位層，製糸業，精密機械工業，下諏訪町

はじめに—土地利用変化と文化層序

生態学における植物の遷移理論を援用して、地域変化を論じたものにシークエント・オキュパンス *Sequent occupance* の考え方がある。シークエント・オキュパンスとは、いわば地域遷移のようなもので、アメリカ西部の開拓地の生産活動がどのように変遷してきたかを論じたものである。アメリカの『大平原』の著者 Webb (1931) は、グレートプレーンズが柵のない自由放牧の時代から柵を結った管理放牧の時代を経て、穀作農耕民に変わり、それも馬を使った農耕からトラクターの時代へと4つの段階を経て変容したことを明らかにしている。一方、Thomas (1931) は、セントルイスの郊外地域を例に開拓期から工業化段階まで、農耕、近郊、鉱工業を入れて5期に分類している。こうした地域遷移の有効性については Whittlesey (1929) も述べており、Sauer (1925) の『景観の形態学』に通ずるものがある。

それぞれの地域には、長い固有の歴史がある。田中 (1958) は川崎市を対象とした地理的総合研究で、新しい生産活動が表れ始める現象を曙象、それが普及する過程を初象、支配的になったことを顕象、古いものが消えていく寸前のものを残象と呼び、それぞれの活動階梯が地層のように、すなわち地位層をなすとした。田中は結果的に周囲的な、同心円的な地位層や文化扇状地のような考え方を提示した。その考え方に従えば、諏訪盆地

のような地域には峠を越えて京や江戸の文化が流入し、また、様々な物資や生活様式が流れ込み、それぞれの文化の時代層が形成されたと考えられる。しかも、盆地に蓄積された時代層は通常、成層をなすが、場所により斜層になったり褶曲したりしているため、地表に縞模様となって表れていると考えられる。このことはある文化や産業の時代層が、あたかも地球の年代を示す地層のように、現実の土地利用に縞模様になって表れているとも考えられる。本稿では地域遷移の考え方と田中の地位層の考え方を合体し、ある時代の支配的な生産活動を、広い意味で文化層と考え、土地利用にも縞模様として表れる文化層の歴史的順序を文化層序と考える。

本稿では上記の文化層序の考え方を下諏訪の工業に関して検証する。そのために、出来るかぎり土地利用の上で、つまり地図上で確認する作業を進めた。それは、時代によって異なる文化層が、土地利用や景観に如実に表れるためである。またそうした観察結果を聞き取り調査で補足する。

周知の通り、下諏訪町は諏訪大社（秋宮）の門前町を形成する門前町であり、中山道でも唯一温泉の湧く宿場町であった。さらに、下諏訪宿は江戸へのショートカットとなる甲州街道の起点でもあり、いわば文明の十字路に位置していた。諏訪大社（秋宮）の神は遷座して諏訪大社（春宮）に季節的に移動する。また、下諏訪、さらには広く諏訪地域は日本における製糸業の一大産地であっ

た。しかしそうした性格は、さまざまな要因によって、変化を余儀なくされる。第二次世界大戦後には、精密機械工業が多大な発展を示した。しかしながら、精密機械工業もまた、空洞化していくことになる。本稿では、こうしたさまざまな文化層を明らかにするとともに、それらの文化層序を検討する。本稿で対象とした研究地域は、下諏訪駅の北で、諏訪大社下社の秋宮と春宮を含む範囲とした。

製糸業の勃興と展開

1 製糸業の勃興と宿場町

下諏訪宿では、幕末期に友の町の増沢市郎兵衛や立町の三井重次郎が、蔵の大軒の下で座繰製糸を家内工業的に行っていた。「明治維新を迎えた下諏訪町は、これまで宿場稼業にもっぱら依存してきた人々が、早くもその生糸製造業の有利なることに着目するものが多く、下之原の呉服雑貨商中村平助は明治五年御手洗汐に径五尺の水車を仕掛けて、十釜の機械製糸を始めている（下諏訪町史編纂委員会 1963：154）という。なかでも、「三井仁兵衛、増沢市兵衛等は、明治九年座繰製糸を廃して、富岡製糸に模し、水車により蒸気を用いて、仏国向生糸の精製につとめ、共同出荷のため結社して、糸格を白鶴と称して横浜に出荷する」とあり、後の白鶴社には岩本甚蔵、岩波芝吉が加わった。1882（明治15）年には仏国向製糸を米国向けに改めている。なお、1879年現在、下諏訪の製糸業者16名のうち、「大半が宿場時代からの旅館、商業者であり、（中略）、宿場依存者が憤然立って、当時の新興産業製糸に転向したものとみられ」、それが半農半商であった岡谷・川岸の製糸業者と比較した特色であった¹⁾。

白鶴社とならんで生糸の出荷ブランドとなったものに製糸組合七曜星社がある。この会社は下諏訪町最初の製糸工場である中村平助工場を買収して、1884年に三田川製糸を設置した小口善重が、翌年に共同出荷組合七曜星社を八木町に建設したことに始まり、機械製糸の共同出荷をした。これには小口氏の出身地の平野村（5名）をはじめ、

長地村（5名）と地元の井上善治郎、河西善之助の12業者が加わった。しかし、社長の小口善重は1890年、工場を売却して平野村下浜に戻り製糸業を続けた。

なお、やはり製糸業の立地条件を考える上で、ここで萩倉の製糸にふれざるをえない。下諏訪宿から北に2 km、中山道からはずれた、砥川の支流東俣川の河岸段丘上に萩倉集落がある。この集落に1878年、篠遠六蔵、篠遠兼義、篠遠道蔵、小河原丑蔵等が相前後して製糸を始め、同時に後3者は製糸組合明撰社を組織している。また、1900年には後2社で萩倉合名会社とした。この会社は二つの製糸工場を買収し、第2工場とし、第3工場も建てた。1902年頃には萩倉には合計7つの製糸工場が立ち、製糸工500余人が働く製糸工場町へと一変した。つまり、三層、五層の白壁多窓の乾繭庫と宿泊施設を兼ねた工場、飲食店、氷水屋ができて都会の様相を呈したという。

揺籃期の製糸工場には燃料の確保が第一条件であった。萩倉の集落は繭を煮るのに不可欠な燃料を確保する共有林に近く、国有林の入口に立地していた。当時、製糸工場の動力として水車が使われたが、萩倉には東俣川から取り入れた萩倉汐が村中に分流して水量も多く、落差も十分であった。また、原料繭は和田峠越えて荷馬車、小荷駄馬で運搬されたが、集繭して出来るだけ早く、生糸をとる必要があったため、原料産地に近接していた萩倉は下諏訪宿より有利であった。また、製糸女工も徒歩であったため峠は苦にならなかった。さらに萩倉は江戸時代の新田集落で、1872年には34戸の純農村であったが、親村の下の原より裕福であったという。このことが製糸業を起こす資金になったという。

しかし、1897（明治30）年頃までには薪炭林は切り尽くされ、製糸業の燃料として石炭が使われ出したこと、鉄道の開通が製糸業の燃料難を解決してしまった。しかも、1892年の篠ノ井線の開通、中央東線の開通は、動力の電化と相まって原料繭・工女輸送を容易にした。以後、製糸業は平野部での大資本による工場制工業の時代に入るの

である。このことは萩倉の製糸業に有利な条件が、逆に不利な条件になったことを意味する。事実、萩倉から篠遠兼義製糸が1903（明治36）年八木西に下り、萩倉合名会社は1905年に分工場を春宮大門（八木町）に建設した。しかし、それらの工場も順次廃止して1910年に終止符を打った（下諏訪町誌増補版編纂審議会編 1990：496-501）。三澤（1926）も、「此地の製糸業が原料並に燃料の産地及び其等地方との交通機関の関係によって盛衰したことが極めて明らかに了解できる」と結論づけている。

ここまでみてきたように下諏訪の製糸は江戸時代に上州座繰が伝播し、幕末にはマニユファクチャー的な座繰製糸が行われていたことを示すものであり、機械製糸も富岡の官営製糸工場に倣ったように中山道ルートを通じた峠越えの技術伝播がみられた。しかし、別な見方をすれば、明治維新は無垢の下諏訪町の人々が世界という舞台に放り出されたことを意味し、さらに、諏訪の人々が初めてのグローバル化の波に曝されたことを意味する。製糸業は、いわば諏訪の人々が第一次グローバル化のなかで健気に知力と財力で立ち向かった姿を示したといえるだろう。

2 製糸業の規模拡大 - 立地条件の変化

前述のように鉄道輸送時代に入り、製糸業は平地部に立地し、規模拡大が図られるようになる。地元の製糸場では1914（大正3）年に三井製糸が265釜、笠原、新井製糸工場がそれぞれ123釜と順調に規模拡大を果たしてきた（第1表）。三井製糸は製糸業の安定のためには繭の確保が不可欠と考え、1900年に株式組織の下諏訪倉庫（写真1）を建設している。この5階多窓型の乾繭庫（写真2）は現存している²⁾。さらに、三井組は1910年、1916年にそれぞれ埼玉県本庄市、愛知県豊橋市に県外工場を兼営した。なお、下諏訪町で最初に県外工場を有した製糸会社は、萩倉から八木西に下りた篠遠兼義経営の篠遠組製糸工場で、1907年、茨城県水戸市に設立されたものである。

規模拡大という点で注目されるのは入組製糸

所（匿名組合）であろう。1894（明治27）年から友之町で製糸業を営んでいた山田由蔵は繭買人の川村養吉、小口松五郎および釜屋の河西寅吉と共同で1901年下原字平沢に大規模な製糸工場を操業させた。入組製糸は年々増釜して1907年に280釜の工場となった。ところが、1910年「匿名組合は期限を10年と定めてあったため、同年、協議の結果解散することになり、抽選により工場を分離配分することになった。入組工場は山田由蔵、入一甲工場は小口松五郎、川村養吉、河西寅吉、入一乙工場は山田由蔵の諸氏に決定したが、入一甲工場と入一乙工場は協同して、入一組製糸所として小松松五郎が組長となり発足することとなった」



写真1 下諏訪倉庫事務所の外観
（2004年5月 呉羽撮影）



写真2 下諏訪倉庫繭倉
（2004年5月 呉羽撮影）

(入一通信工業株式会社社史編集委員会編 1981)。河西寅吉の個人経営になった入一製糸の釜数は、1921年(大正10)には、第1表に示したように841で、従業員は工女703,工男85人に上った。しかも、同製糸場は1919年に富山市に200釜の分場を設置するまでになったが、1923年に廃業してしまった。一方、入一組製糸は1911年には670釜、1921年には1,196釜となった。また、1922年には茨城県友部町に120釜、静岡県裾野町に120釜の県外工場を、翌年には湖畔の南四王に入二分工場を設置した。

製糸業の県外工場といえ、片倉製糸や山十製糸であろう。片倉製糸は1899年、湯田新町の井上善治郎製糸工場を買収して、片倉組下諏訪製糸所

とした。しかし、同工場は川岸村生まれの片倉組の下諏訪地域での六番目の工場であったので、六工場と呼ばれた。この工場も順次施設を増強し、1914年324釜、1921年500釜となった。また、岡谷の山十製糸も1909年に下諏訪駅前の小口国蔵製糸を買収し、同社の下諏訪製糸所とした。この製糸所は入一製糸に継ぐ大規模な工場であった(第1表)。さらに、小口組製糸が1918年、萩倉合名製糸八木町工場を買収して下諏訪町に進出した。この工場も1921年の設備が600釜と大規模工場であり、従業員も721人に達していた。また、小口組は1925年に山田源一製糸を買収してカネ八製糸場とした。

かくして、下諏訪町の製糸業の最盛期と考えら

第1表 最盛期における製糸工場の釜数・雇用者数規模

製糸工場名(1921)		1914	1921	1927	1932
大企業	a 入一製糸場	414	841 (788)	-	-
	b 入一製糸場 入二分工場(南四王)	972	1,196 (1,544)	784 (1,087)	780 (733)
	c 片倉製糸下諏訪製糸場 萩倉製糸合名会社	324	500 (622)	458 (561)	370 (535)
	d 小口組カネヤ製糸場 h 合名会社山田製糸場 小口組カネ八製糸場	-	600 (721)	576 (859)	546 (612)
	e 山十製糸 下諏訪 昭栄製糸下諏訪工場	575	713 (857)	745 (888)	- 408 (791)
	f 合名会社三井組	265	312 (306)	300 (375)	-
	g 山二製糸場(笠原) # 製糸場(新井) 角正中村製糸所	123	152 (139)	150 (193)	202 (215) 180 (172) 200 (215)
	i 藤森製糸場	13	21 (24)	36 (39)	40 (44)
	j 松沢製糸場	10	24 (26)	24 (20)	67 (33)
	k カネ九製糸場(金丸)	-	20 (23)	50 (34)	50 (51)
小企業	l 山万製糸場(河西)	-	19 (21)	30 (28)	46 (44)
	m 山三製糸場(宮坂)	-	18 (17)	36 (29)	36 (20)
	コ 御子柴製糸所	-	-	21 (15)	28 (27)
	マ 津金製糸所	-	-	37 (14)	48 (52)
	カネ共 森下製糸所	-	-	20 (22)	-
	加 春日製糸所	-	-	20 (23)	-
	三 林製糸所	-	-	-	46 (51)

単位：釜。括弧内は雇用者数(単位：人)

注) アルファベットは第1図に対応する。

資料：長野県製糸同業組合連合会『大正十年六月現在 製糸工場調』

長野県製糸業組合『昭和七年度 製糸工場調』

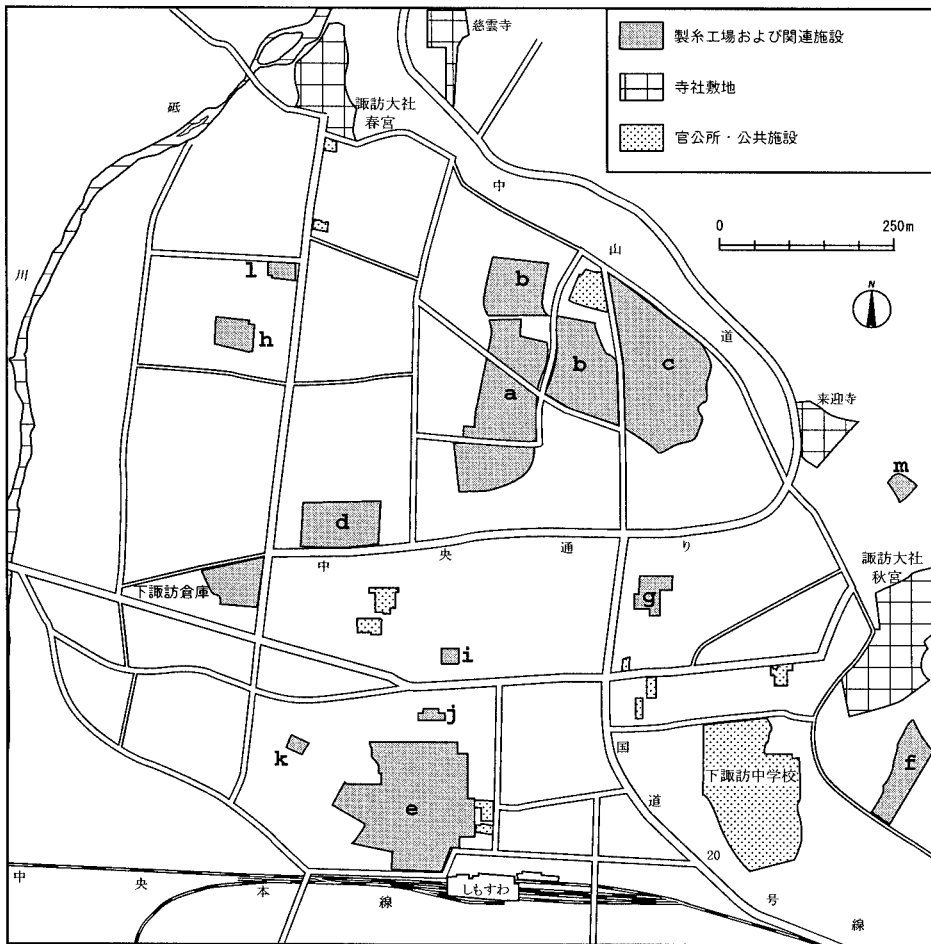
長野県 1980.『長野県史 近代資料編第五巻産業(三) 蚕糸業』長野県史刊行会

れる1921年の製糸工場の分布をみると入 製糸，入一製糸，片倉製糸が御田町にあり，さらに八木町に小口組，駅前に山十組の製糸工場があった（第1図）。これらの5工場だけで，3,961人の製糸女工と571人の男工の合計4,500人を超える従業員がいたのである。これに加えて，地元の三井組製糸，山二製糸（笠原），井製糸（新井）などの中堅製糸会社および藤森，山三（宮坂），山万（河西）などの製糸場の従業員も1,200人に上り，前記と合わせ製糸従業者は6,700人に達していた。このことは正に下諏訪町が製糸の町であったといえることができる。

3 国用製糸の発展と機械製糸の変化

生糸が我が国輸出の太宗を占めて以来，機械製糸は輸出用，国用製糸は国内用生糸の生産を意味するようになった。下諏訪町でも前述のように製糸業は大企業によって行われたので，岡谷市（平野村や川岸村）同様，機械製糸の町であったという感があつた。

しかし，下諏訪町では国用製糸が大正時代に発展したのである。国用製糸の始まりは明治末期で，甲斐絹横糸生産が契機であった。国用製糸は，機械製糸の選別で除かれた大量の繭を利用したため，原料の調達は容易であった。また，足踏



第1図 最盛期における下諏訪町製糸工場の分布（1921年）

注1）図中のアルファベットは第1表に対応する。

注2）道路は1970年頃のもの。

座繰機を用いたため中小規模での製糸が可能であり、敷地の規模や水力などの動力による工場立地の制約がなかった。そのため下諏訪町の中心部に多く存在する家庭に出釜するかたちで生産が進められた。下諏訪町の国用製糸は、結婚・出産後の機械製糸のOG、すなわち熟練女子労働力の活用という側面も有していた。こうした主婦による労働力が利用されたため、保育所も設立された。1925年に、長野県内でもさきがけとなる保育所が下諏訪に開設された。このように、国用製糸は甲斐絹の横糸生産という隙間産業に積極的に取り組んだ結果、大きく発展した。

周知のように、1930年の世界恐慌を機に日本経済も大打撃を受けた。なかでも、輸出に依存してきた製糸業は、「絹よりも美しく、鉄よりも強い」と歌われたナイロンの発明も重なり、操業短縮、人員整理、賃下げや倒産を迫られた。もちろん、このことは諏訪の製糸業が、いわば第二のグローバルイゼーションの波に曝されたことを意味する。その一つは、大規模に企業展開していた山十製糸の倒産にみることができる。倒産した山十製糸は、1931年昭栄製糸が賃借して座繰製糸5緒657釜を持って操業していたが、1932年に競落取得したものである（昭栄製糸株式会社二十年史編纂委員会 1951）。また、地元資本の入一組製糸所も1931年には入一製糸株式会社となり、友部工場も別会社として発足した。しかし、入二工場では賃金未払いに対するストライキが起り、苦難のスタートとなった。そこは1932年入山四王製糸所として再出発した。入一製糸は昭栄製糸の「賃挽き」をするなどして苦境に耐えたが、経営不振が続く中、太平洋戦争に入っていく。

製糸から精密機械工業への転換

昭和初期に隆盛を極めた製糸業は、昭和恐慌や第二次世界大戦を通じて衰退した。第二次世界大戦後、製糸業は一時的に復興するものの、精密機器を中心とする機械工業へと、産業の中心は移っていった。下諏訪では、明治期以来の製糸機器補修や疎開企業によって培われた技術的基盤を活用

し、精密機器製造を中心とする多数の事業所が創設された。その中には繊維工業から転換し、精密機器製造へと進出したものもあった。

1 転換の経緯

昭和初期に大きな転換点を迎えた下諏訪の製糸業は、それ以降規模を急速に縮小させた。そして、1935年以降の数度にわたる企業整備令によって、その凋落は決定的となった。1930年代後半になると、閉鎖工場が増加し、遊休地が多数発生した。下諏訪では、それらの遊休工場に、航空機・通信機・光学機器等の軍需産業の工場が戦時疎開により立地し、東京スチール製作所（入一）、日本小型飛行機（片倉下諏訪）、大和無線電機（入山四王）などが、製糸工場跡地等を利用して立地した。第二次世界大戦終結後、疎開工場は多くが平和産業へと転換し諏訪地域から撤退したが、一部の企業は残存した。下諏訪町では、大和無線電機が大和電機工業として残存したほか、第二次世界大戦中に通信機関係へと転換した旧入一組製糸が、入一通信として立地し、下諏訪町の工業化をリードする存在となった。

片倉製糸など、疎開工場に接收されていた旧製糸場は、1946年以降各企業に返還され、生糸と織物生産が再開された。第二次世界大戦直後、製糸業は一時的に復興を遂げた。しかし、1950年代に入ると、ナイロンなどの化学繊維やアジア諸国の台頭によって、下諏訪の製糸業は再び、衰退へと転じた。とくに、朝鮮戦争を契機として化学繊維の需要が増加すると、一部の製糸工場はメリヤスなどの織布へと転換していった。

その一方で、製糸工場の中には、戦後復興の影響を受け、急成長を続けていた精密機器製造への転換を模索するものも存在した。1960年代には、精密機械工業の発展を受けて、中古品の旋盤1台程度を擁した納屋工場と呼ばれる小規模工場が、諏訪地域では大幅に増加した（宮沢 1960；江波戸ほか 1975）。しかし、板倉（1956）が指摘するように、製糸業と精密機械工業との間の資本関係はそれほど強くなかった。製糸業から精密機器製

造へと進出・転換した製糸場は、大部分が中小規模のものであり、大規模なものは入一組製糸（現、入一通信）など少数に限られた。また、製糸業から精密機械工業に直接転換するのではなく、メリヤス生産を経て精密機械工業へと転換したのも多かった（下諏訪町誌増補版編纂審議会編1990）。

板倉（1966）は、製糸業と精密機械工業の関わりについて、製糸関係の男性工や製糸機器補修工場の存在に注目している。製糸業は製糸女工に依存する工業であったが、そのなかで製糸機械の修理を行ったのは男工であり、その技術は男の活躍の場であった。彼らは間接的に製糸業に係わっていただけでなく、製糸機械補修などを通じて、簡単な機械加工技術を保有していた。これらの労働力は、その後の疎開工場や精密機械工業の勃興期に、労働力として活用された³⁾。このように、精密機械工業と製糸業との関わりは、直接的な資本関係よりも、どちらかといえば間接的な技術関係に強くあらわれている。

以下ではその一例である製糸問屋五味商店（現、五味工業）を事例に、下諏訪工業の製糸業から精密機械工業への産業の転換の経緯を追う。

下諏訪町中央通に1000坪の敷地を持つ五味家は、下諏訪では比較的規模の大きな製糸問屋であった。五味家は、製糸問屋を営む傍ら、イタリア製の織機を利用し、メリヤスの生産を行っていた。製糸業の凋落とメリヤス生産の斜陽化が決定的となった1960年代、五味商店は家業の立て直しを迫られた。1966年、五味家は家族会議を開き、今後の家業をいかにすべきかとの議論を行った。その結果、五味家は将来性に乏しい製糸問屋・メリヤス生産を廃し、有望な精密機械工業への転換を決定した。

1966年4月、五味家は、個人企業として五味工業を設立した。電機メーカーを退職した五味氏は、自社の仕事を行う傍ら、下諏訪町内にある知り合いの精密機器製造事業所に通い、技術を習得した。1972年、五味氏は、精密機器製造事業所で機械の専門家として働いていた弟を加えて、五味

工業を会社組織に改めた。多くの企業が、諏訪精工舎、三協精機やヤシカなどの下請けとして、時計・カメラなどの部品の量産に従事していた1970年代に、五味工業は企業の生産ラインで利用される治工具を生産する道を選択した。治工具は、メーカーでは不採算部門として、早くから生産の外部化が進展していた。五味工業はこれらの需要を受けて、順調に生産をのばした。エレクトロニクス技術革新、メカトロニクス技術革新の下で、メーカーの下請けに従事してきた企業は、アジア諸国との競争に敗れて、その多くが廃業した。しかし、五味工業は基礎部門を担うことで、幾度かの変革に対して安定的な需要を確保し、下諏訪町の精密機械工業で独自の地歩を築きつつある。

2 最盛期の精密工業

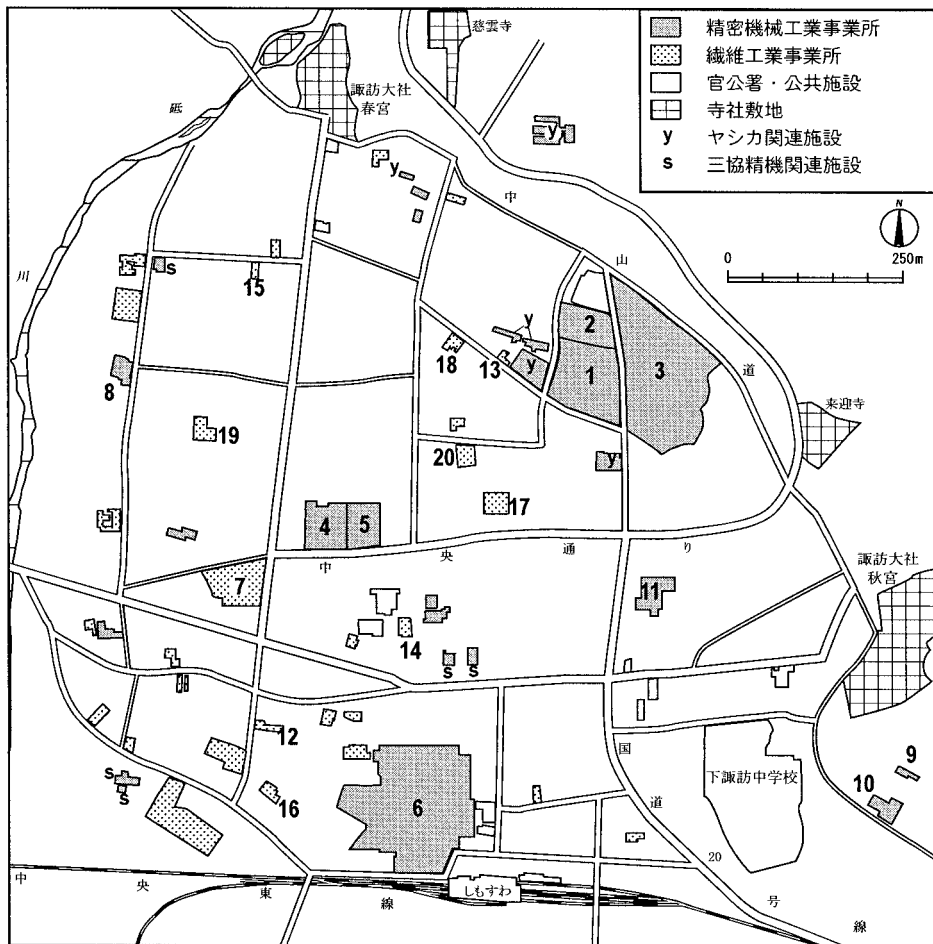
諏訪地域の工業は、1948年の経済安定化9原則によって打撃を受けたが、1950年以降朝鮮戦争の特需ブームにより発展をみせた。特需景気の下、八洲精機製作所（後のヤシカ、現京セラ）、三協精機製作所や日東光学など、諏訪地域の中核企業が数多く創業した。これらの企業を誘致すべく、工場誘致条例が諏訪地域の各市町村で制定・実施された。下諏訪町では、岡谷市と諏訪市に先駆けて、1951年に工場誘致条例が制定された⁴⁾。誘致条例の制定が急がれた背景には、町内に広く残存する遊休工場・製糸場跡地の再活用や江黒鉄鋼（現エグロ）の岡谷移転問題があった。条例の実施当初は、大きな困難に直面したものの、1955年に八洲光学が、片倉製糸場の跡地へと移転した（第2図）。八洲光学は庶民に手の届く「ヤシカ2眼レフ」でヒットしたヤシカカメラである。さらに、1957年には下諏訪駅前前の昭栄製糸跡地を買収して、上諏訪で育ったオルゴールメーカーの三協精機が進出した。しかし、1972年にヤシカは、業務拡大を目的に土地を売却して岡谷市へと移転してしまった。翌年、跡地に武藤工業が立地している。

上記の中核企業は疎開工場より生じたものであったが、これらの企業からさらに新たな中小製

造業が輩出された。それは重層的に行われ、諏訪地域に数多くの中製造業を産み出した。また、その発生を鑑みると、製糸業の存在も看過できない。製糸業によって形成された技術的素地の上に、疎開工場により精密機械工業の技術が成り立ったのである。製糸用バルブコックを製作していた北沢バルブ（現キッツ）から東洋バルブが独立した。東洋バルブは、第二次世界大戦中、陸軍の軍需工場として爆弾の信管などを製造していた。戦後、東洋バルブからヤシカや三協精機が独立・創業し、さらにその孫・曾孫にあたる企業が輩出されている。その点で、これらの疎開工場

は、下諏訪町をはじめとする諏訪地域に、技術的な厚みを持たせる揺籃としての役を担ったのである。

下諏訪の精密機械工業は、1964年の新産業都市指定を受けてさらに発展した。ヤシカは最盛期には3,000人ももの従業者を擁し、映画館などの福利厚生施設も保有していた。1958年の長野県工場名鑑によると、カメラ、オルゴールなどの精密機械工業従業者は、およそ3,000人であり他の産業を大きく凌駕していた（宮沢 1960）。さらに、1970年には、精密機械工業で約5,000人の従業者を雇用するまでに規模を拡大した。すなわち、これら



第2図 下諏訪町中心部の精密機械および製鋼業主要工場の分布（1970年頃）

注）図中の番号は第2表に対応する。

の精密機械工業は製糸工業にも勝るとも劣らない従業員を雇用するまでに成長したのである（第2表）。

これら精密機械工業を支える労働力はどこから供給されていたのだろうか。三協精機やヤシカは、第2図の工場分布図に示したように、多くの寮を市街地中心部に保有していた。ヤシカは従業員の福利厚生施設としてヤシカ会館を所有していたほか、旧入一製糸の場所にヤシカ寮とテニスコートを有し、東町には社宅と女子寮、仲町には女子寮が存在した。同様に、三協精機では栄町、友の町、大社通り、大門および八木町に寮が存在

した。このことは、下諏訪町だけでは従業員の補充ができず、製糸女工の時代のように諏訪地域外から多くの労働者を集めていたことを示すものであろう⁵⁾。また、通勤女工がいたことに加えて、近隣自治体や農村部からの通勤者も数多く存在した。通勤手段は鉄道交通が中心であり、通勤者の居住地は、隣接する岡谷市・諏訪市が最大であった。通勤範囲は、最遠隔地でも小淵沢、塩尻や伊那市など、各交通手段を利用しても1時間程度の距離に限定されていた。

これらの精密機械工業は1970年頃が最盛期であろう。それは1971年のヤシカや三協精機の従業員

第2表 最盛期における精密工業と繊維関係工場の雇用規模

旧施設	1971年の工場名	1961	1971	1975	主要製品・事業
旧入一製糸場	入一通信工業（株）	500	601	595	通信機部品
	協和光機株式会社	-	180	158	カメラ用レンズ
片倉製糸	ヤシカ	2,482	1,577	-	カメラ
	武藤工業	-	-	30	製図機
小口組製糸所	堀内製糸	-	17	-	座繰製糸
	湖北工業	-	90	89	紡績機械部品
昭栄製糸	三協精機株式会社	2,400	2,736	2,406	精密機械・オルゴール
下諏訪倉庫	下諏訪倉庫	-	-	-	-
	三和光機	41	98	50	カメラ部品
三井製糸	三王光機	48	48	73	カメラ部品
	佐藤メリヤス	25	30	34	婦人セーター
	徳永メリヤス	4	15	8	婦人セーター
笠原製糸所	日進工業株式会社	20	31	28	ギター
下山製糸	昭和製糸	25	25	25	座繰製糸
中村製糸所	中村製糸	19	19	19	座繰製糸
藤森製糸	カネセンメリヤス	37	9	10	婦人セーター
	藤森製糸	4	6	-	座繰製糸
金丸製糸	ヤマウ織物工業	-	13	9	婦人セーター
	北原製作所	16	16	16	カメラ部品
宮坂製糸所	宮坂製糸	7	7	7	座繰製糸
河西製糸所	河西メリヤス	10	5	5	婦人セーター
御子柴製糸所	御子柴ニット	17	46	-	婦人セーター
	ヤマトニット	19	37	48	婦人セーター
津金製糸所	津金製糸	20	20	-	製糸
松沢製糸所	松沢製糸（ヤマショウ）	-	17	22	座繰製糸
	松沢製糸（ヤマサ）	10	19	19	座繰製糸
	コロナニット（松沢）	-	134	-	横編メリヤス
	高林ペニー	30	36	38	絹紡ペニー

単位：人、空欄は従業員数不明

番号は第2図と一致する

資料：長野県商工部工業課『長野県工場名鑑』1961，1971，1975

がそれぞれ1,577人、2,736人に達し、多くの従業員を雇用していただけでなく（第2表）、カメラ部品やオルゴール部品など多くの下請け工場を発生させたからである。たとえば、三協精機のオルゴール部門では、下請け工場の立地は広く、小山精機や三光製作所など岡谷、諏訪、茅野市といった諏訪地域内にとどまらず、松本・塩尻、上伊那等にも広がっていた（第3図）。下請け企業の多くは、従業者数10人未満の極零細規模の個人企業が中心であり、切削加工が作業工程の中心であった（諏訪教育会編 1985）。中核企業は、このような下請け企業を直接・間接的に系列として保有し、部品などの加工・供給先として活用した。

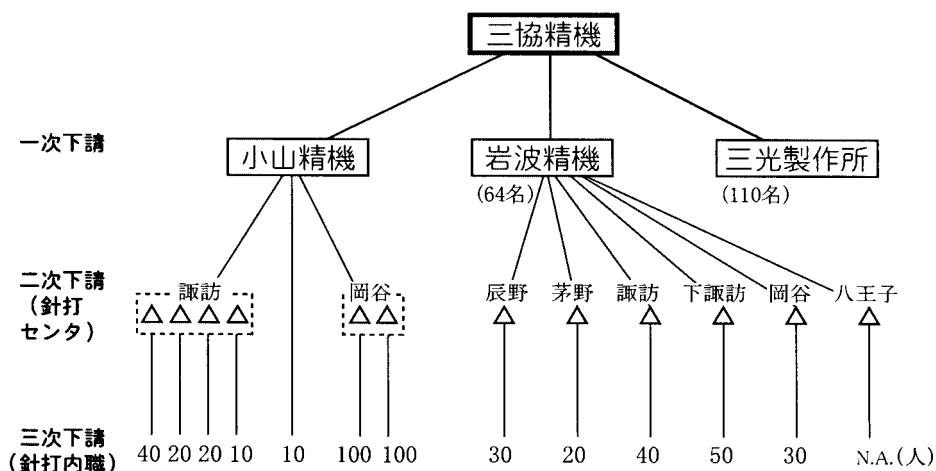
しかし、1980年代に入ると、価格競争などによる企業競争力の強化を目的とした、メーカー企業の海外展開が活発化した。その影響は、諏訪地域の中核企業にも及んだ。諏訪地域では、諏訪精工舎（現セイコーエプソン）やオリンパス光学が、1970年代後半から海外展開を行っていた。その過程で、ヤシカは精密機械光学の競争に敗れてしまう。岡谷市に大規模工場を建設して移転したヤシカであったが、1983年に倒産し、京セラに買収さ

れてしまう。また、下諏訪町の工業をリードしてきた三協精機や入一通信も、海外企業との競争に苦しめられることとなった。さらに、1980年代には、技術革新が起こり、光学機器の分野で製品のデジタル化が進んだ。そのことが、8ミリカメラや一般のカメラなどの生産に従事してきた諏訪地域の中小製造業を窮地に立たせることとなった。

3 繊維産業の衰退

前述のように、大規模製糸工場は精密機械工業への転換を積極的に行った。その結果、製糸業としては、戦前の国用製糸の中小工場が多く残存することとなった。1959年において下諏訪町内に42か所の国用製糸工場（免許釜数総計559）が存在したが、そのうち32か所が町中心部に位置していた。いずれの製糸場も30釜前後以下と小規模であった（下諏訪町誌増補版編纂審議会編 1990）。しかしながら、その後、工場数は徐々に減少していく。

一方、1960年代には、メリヤス産業の発展が生じた。もともとは戦時統制によって凋落した製糸業に代わって導入されたものであった（下諏訪町



第3図 三協精機のオルゴールドラム針打工程の連関構造（1960年）

（資料：諏訪教育会編（1985））

注1）図中の数字は従業者数を示す。

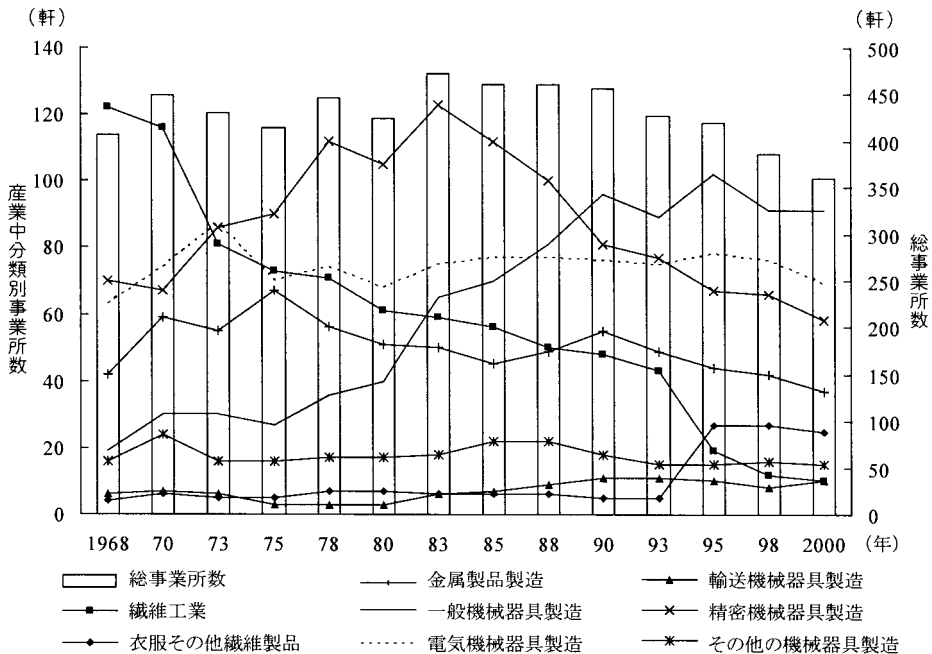
注2）小山精機の従業者数は不明。

誌増補版編纂審議会編 1990)。戦後、製糸業が減少する中で、メリヤス産業へと転換する業者が出現した(第2表)。製品としては、婦人用セーターや作業衣を生産する工場が卓越した。メリヤス産業も最盛期には従業員寮を有していたほどの規模を誇っていた。しかし、諏訪のメリヤス生産は工程間分業が進んでおり、作業が細分化されていたため、大規模化しにくかった実情がある。1970年代前半にメリヤスやニットにも不況が訪れる。さらに、大都市の商社や問屋の下請企業性格が強かったこと、安価な輸入製品が増加したことなどによって衰退の一途をたどることになる。すなわち、下諏訪のメリヤス生産は、手工的側面が強く、製糸業を代替しうる地位たり得なかったと思われる。

第4図は、工業部門別の従業員数の推移を示したグラフである。これによると、繊維工業は、1960年代から既に衰退傾向を示している。また、第3表は、従業員規模別の工場数を示したもので

ある。繊維工業部門では、工場数が1971年から徐々に減少していく。2000年では繊維工業の工場は22のみであり、そのうちセーターを生産する事業所は7にすぎない。

次に、これらの繊維関係工場の変遷をみていこう。第4表は下諏訪町中心部における主要工場の従業員規模の変化を表している。主要製糸工場は、そのほとんどが1970年代までに生産を止めている。またその後も、徐々に減少し、1990年代には松沢製糸と昭和製糸の2業者となった。2004年現在、存在している製糸工場は、松沢製糸(ヤマショウ)のみで、機械製糸を行っている(写真3, 写真4)。国産の繭は品質が揃わないため、トルコ、中国やブラジル産の繭を用いているが、ブラジル産の繭の品質が最も良い。それは現地で日本人技術者が生産指導を行っているためである。生糸は高級品織物向けとして出荷されるが、とくに帯や力士の化粧まわし用の太糸の需要が高い。中国ではこの種の生糸の生産ができないため、そ



第4図 下諏訪町における産業中分類別にみた繊維・機械金属工業事業所数の推移(1968~2000年)
(資料:工業統計調査)

第3表 下諏訪町における繊維・機械金属工場数の従業員規模別変化

工業部門	年	従業員数規模										合計
		-9	10-19	20-29	30-49	50-99	100-199	200-299	300-499	500-999	1000-	
繊維工業	1956	6	3	3	2	1	0	0	0	0	0	15
	1967	35	15	12	6	5	2	0	0	0	0	75
	1971	44	19	6	5	1	2	0	0	0	0	77
	1975	28	14	3	4	1	1	0	0	0	0	51
	1979	21	15	2	4	3	1	0	0	0	0	46
	1989	20	4	2	1	3	0	0	0	0	0	30
	2000	10	5	3	1	3	0	0	0	0	0	22
機械金属工業	1956	3	7	0	1	2	0	0	1	0	0	14
	1967	66	39	8	7	6	3	0	1	2	2	134
	1971	112	33	7	5	6	3	0	1	2	2	171
	1975	84	26	7	6	7	3	0	1	2	1	137
	1979	109	48	8	9	8	0	2	0	1	1	186
	1989	96	36	13	5	5	2	1	2	1	0	161
	2000	101	33	7	4	8	5	2	0	0	0	160

資料：長野県商工部工業課『長野県工場名鑑』各年版



写真3 松沢製糸場の機械式製糸の様子
(2004年5月 呉羽撮影)



写真4 松沢製糸場の揚返工程の様子
(2004年5月 呉羽撮影)

れは丹後や長浜に出荷される。一方で、廃業した製糸場のほとんどは、現在では住宅地へと転用されている。一部、大規模な敷地を有していた製糸場の跡地は、別の工場へと転用されている。同様に、メリヤス工場も廃業が多い。比較的規模が大きいメリヤス工場は、現在でも経営を続けている(第4表)。

4 精密工業の凋落

古くは製糸業を中心とした繊維工業で、またその後は精密工業に転換し繁栄した下諏訪町の工業であったが、1970年頃から工業は衰退に転じている。これは、主として工業を取り巻く状況の変化に基づいているが、中国をはじめとするアジア諸国の台頭の中で、第3次グローバリゼーションの中に晒されたことを意味する。1970年頃には1万人以上の従業員を有していたが、その後は衰退の

第4表 下諏訪町中心部における主要工場と事業所の雇用規模変化

1971年の工場名	1979	1985	1989	1995	2000	工場転換経緯・現在の土地利用
入一通信工業(株)	291	263	370	H	F	2002年頃武藤工業へ
協和光機株式会社	-	-	-	-	-	住宅地
ヤシカ	-	-	-	-	-	1973年武藤工業へ
武藤工業	77	95	142	F	F	存続
堀内製糸	-	-	-	-	-	湖北工業へ
湖北工業	43	75	59	E	E	存続
三協精機株式会社	1 405	1 500	943	I	G	存続
下諏訪倉庫						存続
三和光機	63	100	-	-	-	別工場(塗装)
三王光機	80	80	58	E	E	住宅地,工場は移転(新町へ)
佐藤メリヤス	47	47	54	E	E	存続,名称変更(サトー)
徳永メリヤス	8	-	-	-	-	住宅地
日進工業株式会社						駐車場(転用年不明)
昭和製糸	10	15	9	A	-	空工場
中村製糸	-	-	-	-	-	住宅地
カネセンメリヤス	8	8	8	-	-	住宅地
藤森製糸	-	-	-	-	-	住宅地
ヤマウ織物工業	16	9	6	-	-	住宅地
北原製作所	18	11	8	A	A	存続
宮坂製糸	7	-	-	-	-	別工場
河西メリヤス	-	-	-	-	-	別工場
御子柴ニット	-	-	-	-	-	別会社事務所
ヤマトニット	45	40	29	C	C	存続
津金製糸	-	-	-	-	-	住宅地
松沢製糸(ヤマショウ)	21	13	-	A	B	存続
松沢製糸(ヤマサ)	14	13	6	A	B	1980年代後半松沢ニットへ
高林ペニー	50	48	-	-	-	別工場

単位:人,空欄は従業員数不明

1995および2000年は従業員規模を示す。

A: - 9; B: 10 - 19; C: 20 - 29; E: 50 - 99; F: 100 - 199; G: 200 - 299; H: 300 - 499; I: 500 - 999

番号は,第2表および第2図と一致する

資料:長野県商工部工業課『長野県工場名鑑』各年版および現地調査

一途をたどっている。現在では4000人弱の従業員規模でしかない。第4図のグラフを参照すると、機械金属工業では1970年代初頭から従業員数が減少し、1980年代半ばからさらなる衰退を示している。2000年現在では、主要工業部門は一般機械器具工業となっている。これに電気機械器具工業が続いている。

前で述べたように、下諏訪町、さらには広く諏訪地域において、製糸業から精密工業への業種転換が生じた。しかし、1970年代に入ると精密工業も凋落の兆しをみせる。まずは、1972年、ヤシカ

が岡谷市長地に移転した。これによって、約1500人の従業員が下諏訪町から減少した。また、ヤシカの工場跡地を買収し、1973年に進出した武藤工業は、製図機械メーカーであるが、その従業員は100人以下と著しく少なかった。その後、同事業所の従業員数はやや増加したものの、現在でも200人以下である(第4表)。三協精機も1970年代前半までは2500人前後の従業員を雇用していたが、その後半から従業員の削減を行い、1980年前後には1500人へと減少した。その後も人員削減による減少が続き、2000年には200人台にまで減

少した⁶⁾。入一通信も、徐々に従業員数を減少させ、現在では工場を閉鎖し⁷⁾、武藤工業がその敷地に進出している。

機械金属工業におけるこうした少数の大規模工場の存在に加えて、非常に多くの小規模工場が卓越することも下諏訪町における工業の特徴である。第3表によると、先述した大規模工場における従業員数の減少が把握されると同時に、小規模工場が多いことがわかる。とくに、機械金属工業部門では従業員数10人未満の小規模工場が半数以上を占めている。それらの多くは、大規模工場の下請工場的性格が強いものである。『長野県工場名鑑』には、各事業所の主要製品名が記されているが、それによると、カメラ部品関連の事業所が多くを占める。しかし、規模は縮小している。またその数は、1967年44、1979年53、1989年57、および2000年42と推移し、精密工業が衰退しつつある現在においても、カメラ部品は機械金属工業部門では依然として有力な製品となっている。

5 下諏訪町工業の変容

機械工業が精密機械工業を中心に規模を縮小する一方で、1980・90年代には諏訪地域の工業では業種構成や生産内容などの面で質的な転換が進んだ。諏訪地域では、1980年代から精密技術と電子技術とを複合させたメカトロニクス化の進展が顕著となった。さらに1990年代以降は、電子技術により特化したデバイス生産が、精密技術と融合して当地域の産業として定着してきた。こうした影響を受けて、下諏訪町の工業も質的な転換を迎えた(第4図)。1980年代に精密機器を製造する事業所が大幅に減少した反面、一般機器を製造する事業所の件数が大きく伸びた。1990年には、事業所数で一般機器が精密機器を上回り、1995年には精密機器の事業所数は電気機器に次ぐ地位まで低下した。

市街地内部での工業の立地も大きく変わった。元来、平地が狭小である下諏訪では、企業の拡張や新設備の導入などが困難であった。それにより、比較的早い時期から工業の分散や移転が進ん

だ。町内では、湖畔の沖積地や町域北部山間平地の工業団地への移転が活発に行われた。

下諏訪町では、町役場庁舎の移転と並行して、庁舎周辺に工業団地を造成した。また、民間企業による開発・造成が、赤砂・鷹野などの湖岸諸地区で進んだ。それらの土地へは、業務拡張や新規創業を企図した企業が、立地・移転した。このような例で、大規模かつ早期に行われた例は、荻原製作所の移転であろう。小型ポンプを生産する荻原製作所は、1952年諏訪市から旧入一製系敷地の北部へ移転してきた。移転当初は小型電気モーター生産を主体としていたが、1967年に業務拡張を目的として西赤砂に移転を行った。また、円筒研削を専門とする円研工業は、業務拡張を目的に、1980年役場北隣の現在地へと富部から移転している。1990年から開発が進んだ町域北部の町屋敷工業団地へも企業の移転が進んだ。しかし、これらの工業団地は、小規模なものが多く、地価も高かった。また、山間地に造成されたため、立地条件は決してよいものではなかった。そのため、安価で広い敷地を求める企業は、茅野市などの諏訪地域東部や上伊那、さらには下伊那へと流出している状況である⁸⁾。

ただし、企業移転などによるこのような企業数の減少が、直接的に下諏訪町の機械工業や精密機械工業の衰退を示すものではない。このような業種構成の変化の背景には、海外企業との競争によって、生産品をシフトさせてきた事実がある。下諏訪町に立地する市川製作所は、創業当時カメラなど光学機器の駆動部品を手がけていた。しかし、海外企業との競争や取引先メーカーの海外展開などにより、光学機器以外の部品加工へと業務内容を拡張した。また、田中工業も創業者が三協精機から独立した後、時計製作に関連する治工具生産を手がけたが、後に半導体装置部品・液晶装置生産等が盛んになると、生産工程で使用される治工具生産へと転換してきた。他の中小製造業においても、特定の製品の生産に特化しているわけではなく、多種多様の機械金属製品を生産しているのが実情である。また、先進部門への取り組み

も盛んであり、最先端の技術による部品生産も行われている⁹⁾。

しかし、業種構成や生産品目は変化してきたが、製品を生産する技術的な基盤は変化しなかった(第5表、写真5)。これらの企業は、高い技術力に基づいて、現在、下諏訪町で自社製品や試作品の生産・開発を行っている企業である。しかし、いずれの企業も創業時と現在とで主要生産技術は変化していない。一般に、生産内容を転換させるには新規設備への投資をとまうが、これらの企業では設備更新程度にとどまっている。これは既存の設備を活用し、技術を深化させることで質的な転換を図ってきたことを示している。古くは製糸業で培われ、第二次世界大戦中には疎開工場によって陶冶された下諏訪町工業は、経済のグローバル化の波に曝されながらも、業種・生産品の転換を通じてねばり強く生き続けているといえよう。また、それを可能とした技術的な基盤は、精密機械工業に立脚している。すなわち、下諏訪町ひいては諏訪地域における現在の工業は、過去

の製糸業・精密機械工業での蓄積という文化層の上に立脚しているのである。

しかしながら、上述のように主要企業の下諏訪からの撤退も続いており、下諏訪町では工業のみに依存しない、多様な町づくりを模索している。その一つとして、下諏訪町では観光産業に注目しており、宿場町の再生が町の重要な課題ともなっ



写真5 NC 工作機械による加工の様子
(メカトロ 2002年5月 藤田撮影)

第5表 下諏訪町に立地する試作開発型中小企業群の概要および技術的基盤の変遷(2004年)

事業所名	従業者(人)	創業年(年)	生産内容	主要加工技術	
				創業時	現在
ヤマト	80	1964	各種機械部品・ペンディングマシン・IPS など	切削・樹脂加工	切削・樹脂加工
五味工業	25	1966	治工具・各種生産器具	切削	切削
円研工業	16	1970	機械部品・金型部品・治工具部品(円筒物)など	円筒研削	円筒研削
田中工業	15	1976	半導体製造機器部品・治工具など	切削	切削
黒栄工業	12	1967	治工具・専用機部品など	切削	切削
メカトロ	8	1983	オゾン発生器・医療機器・各種部品など	精密板金	精密板金など
サカヅメエンジニアリング	4	1979	プレス金型・CAD プログラム・防震マウントなど	プレス・切削	切削など
市川製作所	3	1961	測定器部品・宇宙探査器具部品など	切削	切削
戸田工機	3	1986	樹脂製検査用試作部品・治工具など	切削	切削
センターパーツ	2	1986	治工具・金属材料切断加工	切削	切削

(聞き取り調査により作成)

注) ゴシック文字は自社開発製品を示す。

ている（小島ほか 2005）。かつて、製糸業や精密工業が全盛期だった頃には、温泉を有する下諏訪宿は、その盛り場として重要な機能を果たしていた。また、商業、工業と観光とを結びつけた「下諏訪匠の町」プロジェクトも進められている。観光を機軸とした新たな動きが、下諏訪宿のルネサンスとともに脚光を浴びつつある。

むすび

諏訪の地域研究の第一人者である三澤勝衛の研究（三澤 1926）に即していえば、諏訪地域の古層は綿打ちをした綿花を篠巻きにする江戸時代の綿花加工が当時の文化層ということができる。そして和田峠を越えてきた上州座繰りが横浜の生糸輸出と結びついて諏訪の製糸業が発達した。見方によっては諏訪という地方が世界経済と結ばれた結果、つまり、諏訪がグローバル化の波にさらされ、諏訪の人たちの才能が開花し、地元産業としての製糸業の勃興をもたらしたといえよう。諏訪地域において製糸業は、片倉製糸に代表されるように日本の標識的地域となった。経済的には製糸業はマニュファクチャーから産業資本に転化し、製糸業の全盛時代を迎えた。

このいわば、製糸業のクライマックス＝極相である製糸文化層のなかで世界恐慌に遭遇する。生糸に代わるナイロンの発明と世界恐慌の波が、いわば諏訪を襲った第2波のグローバル化ということができよう。しかし、製糸業のなかで培われた製糸機械の修理技術は、太平洋戦争の疎開工場と結びついて精密機械工業へ発展していく。下諏訪町の工業政策の影響もあってカメラやオルゴールといった精密機械工業の花形となる工場が多く立地した。主要な工場は多くの従業員を

抱え、複数の寮や福祉施設も有した。こうした基幹産業の発展に基づいて、宿場町や町の中心部は歓楽機能を媒介として繁栄した。

この精密機械工業の文化層も、諏訪地域全体ではエレクトロニクスに転換していくのであろうが、下諏訪では、労働力の国際競争という、いわば第3波のグローバル化となった。精密機械工業をはじめとする日本の工業部門の多くは、安価な労働力を求めて、中国や東南アジアへ生産部門を展開させた。諏訪地域でも、中核企業が研究開発部門を地域内に残存させた一方、組立など労働集約的工程をアジア地域に展開させた。下諏訪の精密機械工業も、打撃を受け、先に衰退した繊維産業を追従し、規模を縮小させてきた。部品供給を担っていた中小製造業は打撃を受けた。しかし、中核企業に随伴して海外展開し、現地で部品供給を担うほか、自社技術の高度化や先進技術の導入を通じて、このような転換点乗り越えた企業も数多く存在する（山本・松橋1999）。このような転換・進取の取組こそが、グローバル化という荒波を乗り越える原動力となってきたのであろう。

過去の文化層が上記の展開をみせた一方で、新たな層の形成もみられる。下諏訪町は第3の波に打ち克つ道を模索してきた。その一つの回答が、観光であった。いまや、観光は観光業以外の産業との連携を強め、新たな文化層を築きつつある。下諏訪町は江戸時代中山道でも殷賑を極めた宿場町であった。町は、その基層を再認識し、宿場町の再生・復活に踏み出した。この宿場町ルネサンスが、現在さらには今後の下諏訪を把握する重要な鍵になると思われる。

本稿を作成するにあたり、下諏訪町商工観光課、下諏訪町産業振興センターの中込 洋氏、下諏訪倉庫の三井章義氏の皆様にお世話になりました。また、斎藤一郎氏、小口勝郎氏婦人、五味工業の五味 信、五味 威氏をはじめ下諏訪町にお住まいの皆様には、長時間にわたる聞き取り調査にご協力を賜りました。以上、末筆ながら記して、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 下諏訪宿において製糸業に転向した旅館・旅籠は、本陣(岩波芝吉)、脇本陣(丸屋金八)、桔梗屋(両角直也)、湊屋昌三、かめや(溝口)であり、商家では三井仁兵衛、増沢市兵衛、岩本甚蔵、小口森蔵、永田国三郎、宮坂梅上右衛門であった。これらは庭先でのマニファクチャー段階を経て、機械製糸に向かったものと思われる。また、農業からの転業は萩倉や下の原集落の人が多かった。
- 2) 乾繭庫として利用されたのは、1965年までである。その後は一般倉庫としての機能を担っている。現在、倉庫の一部は下諏訪倉庫蚕糸資料館として一般開放されている。
- 3) 板倉(1966:74)は、この状況を「高圧バルブの北沢工業の設立者は立志伝中の人物といわれるが、製糸工場で蒸気パイプの修理を手がけたのが、斯業に入る第一歩であった。(中略)、地元資本で進出している三協精機(オルゴール・8ミリカメラ)、ヤシカ(旧ヤシマ光学)の設立者は北沢工業の出身であるほか」と評している。
- 4) 岡谷市、諏訪市は1953年に相次いで工場誘致条例を制定している。
- 5) 下諏訪町誌増補版編纂審議会編(1990)に基づいて、ヤシカの1963年時点での従業員の出身地をみると、全従業員2258人のうち、長野県出身者が89.5%を占める一方で、10.5%の県外出身者が存在した。長野県出身者のうち、諏訪地域内出身者が69.0%と大半を占めていた。また、県外出身者の出身地は東京を中心とする関東地方が最大であり、それに次いで北陸地方が多かった。
- 6) 業績の不振が続いた三協精機は、2001年から2003年に大規模な合理化を実施し、全社で400人の人員削減を実施した。また、飯田工場などの生産拠点を、この時期に整理・統廃合している。2004年には、三協精機は資本提携により日本電産の子会社となった。
- 7) 入一通信は、現在本社を東京都中野区に置き、長野県内の三郷村、上松町および和田村、さらにはマレーシアに拠点を有している。
- 8) 柳平(1984)や山口(2003a;b)によれば、これは諏訪湖沿岸の岡谷市・下諏訪町・諏訪市共通の状況である。
- 9) 藤田・小田(2001;2004)は、近年の中小製造業の生産の特徴として、自社の既存設備を活用して業務を多角化する傾向があることを指摘している。また、生産内容についても、特定の類型にあてはまらない、不特定の機器部品生産が行われつつあることも同様に述べている。

参考文献

- 板倉勝高(1956): 諏訪盆地における工業の変化。人文地理, 11, 240-255.
- 板倉勝高(1966): 『日本工業地域の形成』大明堂。
- 市川健夫・斎藤 功(1976): 『再考日本の森林文化』日本放送出版局。
- 井出策夫(2002): 諏訪・岡谷の精密機械工業集積地域。井出策夫編『産業集積の地域研究』大明堂, 95-108.
- 入一通信工業株式会社社史編集委員会編(1981): 『50年の歩み』入一通信工業株式会社。
- 江波戸昭・赤坂暢穂・樋口兼久(1975): 「納屋工場」の成立と変貌。岡谷市長地地区の場合。駿台史学, 36, 80-102.
- 片倉工業株式会社調査課編(1951): 『片倉工業株式会社三十年史』片倉工業株式会社調査課。
- 小島大輔・中村裕子・久保倫子・呉羽正昭(2005): 下諏訪宿の機能および景観の変化。地域研究年報, 27, 19-40.
- 下諏訪町誌編纂委員会編(1963): 『下諏訪町誌上巻』甲陽書房。
- 下諏訪町誌増補版編纂審議会編(1990): 『増訂下諏訪町誌下巻』甲陽書房。
- 昭栄製糸株式会社二十年誌編纂委員会(1951): 『昭栄製糸株式会社二十年誌』昭栄製糸株式会社。
- 諏訪教育会(1985): 『諏訪の近現代史』
- 田中啓爾編(1958): 『地理的総合研究-川崎市と東京江東区-』古今書院。
- 長野県編(1980): 『長野県史 近代資料編第五巻産業(三) 蚕糸業』長野県史刊行会。
- 長野県下諏訪町役場編(1956): 『下諏訪町工業名鑑1956』

- 長野県下諏訪町役場商工観光課・下諏訪商工会議所編：『下諏訪町商工名鑑』1956，1970，1978，1990年版．
- 長野県商工部工業課編：『長野県工場名鑑』各年版．
- 長野県製糸同業組合連合会（1922）：『大正十年六月現在 製糸工場調』
- 長野県製糸業組合（1933）：『昭和七年度 製糸工場調』
- 藤田和史・小田宏信（2001）：塩尻市における中小機械工業の構造変容と振興政策．地域調査報告，**23**，123-134．
- 藤田和史・小田宏信（2004）：駒ヶ根市における開発型中小企業群の展開．地域地理研究 **9**，42-53．
- 三澤勝衛（1926）：諏訪製糸業の地理的意義．地理学評論，**2**，813-834，925-951．
- 宮沢志一（1960）：長野県諏訪地方の精密工業 - 製糸より精密工業へ，地域の生産の展開 - ．信濃，**12**，512-525．
- 柳平千彦（1984）：長野県諏訪地方の産業構造の推移と発展 - 製糸業から精密機械工業・メカトロニクス産業へ - ．信濃，**36**，393-408．
- 山口通之（2003a）：長野県の南信三地域（諏訪，上・下伊那）の戦後の工場立地とその展開からみた空間構造 - 三地域の製造業の立地関連と海外進出を中心に - （1）．信濃，**55**，791-814．
- 山口通之（2003b）：長野県の南信三地域（諏訪，上・下伊那）の戦後の工場立地とその展開からみた空間構造 - 三地域の製造業の立地関連と海外進出を中心に - （2）．信濃，**55**，901-917．
- 山本健児・松橋公治（1999）：中小企業集積地域におけるネットワーク形成 - 諏訪・岡谷地域の事例 - ．経済志林 **66-3・4**：85-182．
- Sauer, C.O. (1925): The morphology of landscape. *University of California Publications in Geography*, **2**, 15-54.
- Thomas, L.F. (1931): The Sequence of Areal Occupance in a Section of St. Louis, Missouri. *Annals of Association of American Geographers*, **21**, 75-90.
- Webb, P. (1931) *The Great Plains*. Ginn, Boston.
- Whittlesey, D. (1929): Sequent Occupance. *Annals of Association of American Geographers*, **19**, 162-165.

（2004年12月16日 受理）